



牛を買い、牛を飼う

時は今年の11月18日に遡る。私たち3人は本宮家畜市場という場所に行った。ヌレ子(*)を買いに行くためである。場内には次々と子牛が運ばれてきて、鼻輪を長い手すりに結えられて一列に並ばされている。背中にはスプレーのようなもので番号が書かれている。牛の周りには「どの牛を買おうかな?」と、購買者が見定めている。その背後には「私の連れてきた牛は高く売れるかな?」と、見つめている生産者がいる。▼できるだけ牛を安く買いたい購買者と、できるだけ牛を高く売りたい生産者が一斉に集まるところが市場だ。社会情勢が敏感に価格に反映する。例えば今回は、飼料価格の高騰の影響で肥育農家側(購買側)が買い控えているので、ヌレ子が安いと言われていたのだが蓋を開けてみたら通常価格に戻っていた。1頭あたり70,000円ほどである。ひと月前の価格が2,000円などという異常な安値だったのでチャンスと思ったのだが、考えることは皆同じ、買いに来た人が多かったということだろう。生産者側にとっては良いことが購買者側には痛手となる。お互いの剥き出しの感情が市場で渦巻くダイナミックな動きが新鮮だった。▼市場で落札した9月26日生まれのPipi(ピピ)と10月23日生まれのPopo(ポポ)は、冬の間近くの酪農家で育てられ、5月19日にSunshineの農場にやってきた。88番・43番と、市場でつけられた番号で呼んでもよかったが、世話になるのだから名前をつけてみようとして私から提案した。しばらくして、「やがて肉になるから、あまり感情がこもらないような名前にしよう」と、農場の塚田さんと菅野さんが考えた名前がPipiとPopoだ。▼今回牛を飼うことにしたのは、パネルの下を有効利用するためだ。一部もともと日当たりの悪い箇所や、細長くてトラクターの入りにくい場所、石が多い場所ではどうしても農作業がしづらい。そんな場所に放牧するのはピッタリなのだ。発電所ができる前の耕作放棄地時代に特に見放されていた場所を、今では牛がもくもくと草を食んでいる。そしてその上では太陽光パネルがエネルギーを生み出している。輸入穀物が高騰していることもあり、草100%の飼い方も新しい畜産のありかたとしてあり得ると思っている。



ぶどうも育ってきています！
9月ごろの初収穫を予定しています。
写真は「クイーンニーナ」で、
これから紅くなります。

▼3.11の震災後、私たちは「エネルギーを自分ごとにしよう」ということを言い続けてきた。スイッチを入れれば電気が来るのは当たり前ではなく、そのコンセントの奥に、しくみや苦勞・リアルがあることを知って欲しいという意味だった。食の分野もまだまだ知らないことが多く、自分ごとになっていないと気づかされている。名前をつけた牛がパネルの下を走る姿は私たちを楽しませるし、草を食べてもらうことで農地が維持され、やがて私たちの胃袋を満たす。私たちは牛の世話をしているようで、実は牛の世話になっているとも言える。牛を買い、名前をつけ、牛を飼うことによって、自分ごとになってきた。次号はPipiとPopoのその後を描く。(近藤恵)

(*)ヌレ子<生後間もない子牛を指す言葉であり、特に乳用種の雄子牛に用いられる場合が多い。生まれたばかりの子牛は、体が乾いておらず濡れていることに由来する>。



Pipi(右)とPopo(左)



パネルの下を駆け回る2頭